



上紙よ
秘傳七名八種

附方八種

糸句
筆も浮世此覚鐘と聞

其人

遠くこの本枕の角まじり居る

其場

湯ありの心屋よらるる竹の毛



母洞

花子鳥の歌も習ふたに雲らされ

時宜

お月雨のこれ悲しくも旅も病々

町節

山雲の雪も三州に幸く是れぬ

三右 軍書
一祈 西歌

梅の息負ふに此は嬉しくて

毛 西歌

草とぬふ子の娘よの葉々

物語
西歌

入る七娘よ後世と云ふ所

親洞

茶臼
笑答の紋を忘れし世に

花返ハ物さ文よ 叶 花

守方

一此子まは後ち文上竹
馬の口言流るれ明不の

こゝ

あふ七名口交

有く

文撰一歌初上子
物 御上定到了子く
仰 若

會報

十分子月よ以流るる子
福 運福 望田よ一
の 調子

述句

礼又さるハ所ハの
勢く 登の 兼 本
原此 種に 年一の
物 衆

記略

大名の作よ冠七
衆

繁子文相と改め奉り奉り

梅子

高の千子と唐屋の修長と
由まゐてまのりとの間の唐紙

白紙

大后なれと妻の四下とあり
高人の指とて一より二あり

巻之三

律子殿と繁のふんありこ
何百里海川と行と松浦の

已上

変化之半

勤

美ゆる御よりあり目と寒
松家のこゑに有る鶴草

雛子節も首よりけりて持れば

持人

昔言上は海軍と投りし
心もぬもころし一程母のこころ
懐りに来れは言上も来海

えん

縁の目押の思ふごとく
宿節も抱くわらむと度平

涼子もさあつる着之の舟

せん

浦山もこの名跡とんそり
御にゆかハ 文衣 ぶり

折 コトストイヘシ
名目

らそよあつるカと指こあし
あつてく 飲もも歌の事さよ

石上條ハ家道の内秘して一巻の
變化と名乗るべく二ら句は不
未だの人比好るやさきよりま

虚言の補解

前文後文

正嘉のつれよんや乃神
^補信のつれよ 鈴 生

ほら文前文

田舎とせしと定半と家
解 小引と明と旅の小遣

虚言の文

ふりつりと名乗るは

虚言の文

仰浩のつれよぬ歌の世界を
ま

作子門の口授し

一 他後の道と云ふ事

二 唐の文の事

三 記定轉合の事

四 偏よ韻字ある事

五 口白目れ授る事

六 花よ梅所る事

七 道季に属る物の事

八 花白の像やうの事

一 他後の二子の事

二 変化の事

三 花白切字ある事

四 花よよの字皮ある事

五 月むの事

六 道季とあはらるる事

七 花白の字の事

八 花白ありて授る事

七 語向とらざる半
一 既字よに傳わる半
二 三 字端のきくの白れり
三 四 句の白れり
五 假名にあらぬ半

八 悉くの白れり
一 一 字の半
二 三 鳥よとる所なる半
四 五 所よ新の白れり

他道のなるとまらざる半

或人曰他道はどのあるまらざるを答曰俗語市
語ときまざる人の為之又同他道のなるとまらざる
又答佛のよいまは二ありと儒のよいまは三ありと道
のよいまは四ありと各々のよいまは五ありと
六ありと七ありと八ありと九ありと十ありと
能言の法も類連を此次にまらざるは向上の略
はあれざる也

能活の二字は

能活此二字ハ古来ニ穿牙堅あり或ハ字書以
ヒテ能ハ非ノ音也或ハ史記ノ隋書トイヒ
テ能ノ字ニ定メテ穿牙堅ノ理ハありト志
スレタレ今漢書ナリ能ノ字ト用ヒテナリト
イハレ故実トシテ誤トシテハ此ノ由ニ由ル
ルニ八雲ハ抄ナシ能活ト能活トハ二種ナリ
能トシテ取ナリ能活ナリ今ナリト看破

眼ナリ玄トモ妙トモ久ハ久トモ言
訣ナリ玄トモ妙トモ久ハ久トモ言
能活ノ二字ハ能活ト能活トハ二種ナリ
穿牙堅ナリト云フ

虚実の事

一カ物ハ虚トモ振テ実ト御ク実ト振テ虚ト御
ク一カ物ハ虚トモ振テ実ト御ク実ト振テ虚ト御
ナリト云フ

むら連、方此嘘也嘘、おしむい能滞の言也
柞、詩身連能といふ由のよは嘘とつる
や、虚よふ言あるを文章といひ、実小虚ある
と世智辨といひ、実小言あるを仁義礼智
といふ、虚よ言あるを世不統なり、或は又
ねとる、い人といふ、い家家の傳授の
人とよふ。

変化の事

文章といふは変化の事也、変化は虚実の自互
をよや黒白言、言流のあやかりて、思ふと
思ふといふと、思ふと白といふも、思ふは言語
変化なり、くを、なより思ふ、白一合也、思ふは天地乃
変化にあらず、人の変化を、思ふは、近居に於
て、傍より、況や能滞、いとのれの家、よを、な
天地は、思ふ、あや、け、め、り、ま、る、秋、そ、の、あ、ま、ま、を、さ、く、い
月、を、の、け、つ、ふ、り、了、り、地、を、れ、い、百、韻、い、百、句、ふ

変化すへいさ半也その変化をあらうてし変化
さうすとゆさうの眼あのみささ句は違ひて
おぼの变化をえさうの好也さしと変化こ
いふよ新ちるさうい人間のまを秋よ新ちる
さうことしそのりおのめれ新ちとえさ
の变化はあさふへー変化はおほしね料理
のひまあくおぐ確くかさうさうよさ
まうさういあーさうあーさうあーさうあーさうあー

変化とさうへー

起定轉合のさ

能言いよ下さうあいさうさうさうさうさうさう
い虚空界は向くサ念おの中は念おと念を
次みなりさうよ也一物をさう付小對して又けさ
さうを脇とりふ始の物と定さ定の字或は請と
し請い上の一物とけのめさうさうさうさうさう
や脇の陰也才さハ一轉して天地より人をさうさう

人の天地より御あはれも天比より出る所と
るる也 念とい万物一合也 歎ふに 統の字は心るは
是より 变化して山あり川ありて 一巻の成就と
いふあり

なむの切字あり

なむの切字といふに 差ふの心也 也いれは なるより
て 是なるを 増と 削と するといふ 著と するといふ 差
別也 是より 削と 増と するといふ 著と するといふ 差

竹のなむの切字あり

桐のなむの切字あり

けいのみなむの切字あり 桐の内
ふし 註あり 是のなむの切字あり

眼のなむの切字あり

眼のなむの切字あり 眼のなむの切字あり
とて 是のなむの切字あり

色くのなむの切字あり

い〜様〜様のあるいさんめ

けりい〜様〜様 能活のさ味とある人の能活の名
同ま〜様〜様とす〜様〜様とれ亦直ま一様とあ
き〜様〜様の差とす〜様〜様とある亦一句お許お眼の放
るはい教字とすおはの泣き〜様〜様とく〜様〜様の
の余情さ〜様〜様とれお〜様〜様と〜様〜様の
あか〜様〜様の眼のんまあ〜様〜様とる亦
の位ま〜様〜様の眼とすこれ位をれ〜様〜様の眼とすのれらと

まげてもあな句ふいひ河〜様〜様の草木山川の一字二
字此凡情とく〜様〜様の余情とけく〜様〜様とる亦
誇け眼と様とすの一字ま〜様〜様の眼とすのれらと

才三ふよ亦あ〜様〜様

才三のるりにふ字のさ味とある亦直ま一様とあ
や〜様〜様の下のとあ〜様〜様の次なり及〜様〜様の
房や〜様〜様のさ味とある亦直ま一様とあ
と〜様〜様の〜様〜様の眼とすのれらと

の中ふまてし權をせむかよに才三のふもしを
これいやくとさりしころありきくもく世不約字
あるは後なりとて或いは後或いは前を或いは
一字か一字ははあまきぬ人の世もせ

かふるもさしよささくか 帝 志

いつ後の所り候しけりこあきくしんを
かき化すをとせりさきとあむとあむあさく
け才三の約字あてきくしんをよれは候

のありあてりまくはしんを

四句目の輕さ

四句目の決あまねの句をれい候文ちるは場定
候しとしかあな句眼才三よりよ骨ありなや
くまきやう句をさきよひましんをその妻
化し句よりしんをさく物合ははは
まきなるより句目まきよまきしんを或は
或は候く或はやきしんを

此書化をえりしは控を中品以下の者
 中品以上の人として控の所託とらむと云
 されし自己の他傍ふくむ人といふ

月日の

月日の秋の的や月日くみありを
 ありて八月もきりてせよと云
 の月と書きし格とくふの所託に二月
 一書のみ月日くみありて一書の八月

月秋とあるも秋をむつとく秋の格
 物と云ふは秋をよのな月ありて書
 らに月日ありてくみありて書
 ねる量の人もありてくみありて書
 らにありて物日の人なる月日七の月日
 十と月日ありてくみありて書
 らにありてくみありて書
 具するてくみありて書

月もものふ影と求むるすしなをそ尾
よりしきふえさうひく毎に仲のうらりとも
それ時の程よきふしに所を並ししはく
奇怪とこのむしりて

むに後所さるる

世ふむといふ所の程のさるるといふ人はあれむ
一か所のふれさるるきとむむむむむの程さ
のむむむむむのさるるむむむむむのむ

むむむむむといふ貴族のさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの
むむむむむもさるるのさるるむむむむむの

むむむむむの
むむむむむの

花の香もよもやしの香

月をのむ花もよもやしの香に
よもやしの香に花もよもやしの香
花の香もよもやしの香に
花の香もよもやしの香に
花の香もよもやしの香に
花の香もよもやしの香に
花の香もよもやしの香に
花の香もよもやしの香に
花の香もよもやしの香に
花の香もよもやしの香に

花の香もよもやしの香

花の香もよもやしの香

花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香
花の香もよもやしの香

花の香もよもやしの香

夜更の文に新なるる也

星月並秋を也月小あす方句小け辞

あす所月此花して是名此月あす人

いれとわい秋のふるふ入れと必々の事

へ一海ふ十月の路か

もよふ新也る神ふとくある事

漢書いま此市ふもよふ

虫砧の秋にあふのふあふねい面白うに花

口傳新古ノ
式伝あり

あふふと一合が一と此介いけ花よと

或ふい治るる

障のね砧の月とあふるは障のとところ打と

いふへ一口傳子多されとがく志しこのたの

方句此付いまよ月由る

或いおん足皮取中の新麻衾をよの

ほね月ゆる地おほ一申る小きる時同季の坊

合々ふとすされと一勾のふあてはよるに

小友とて其申す句もあはれしけし旋に其理の事
合と知く方字此指合と官牙鑿をくつては

友白れ像やうのもの

友白の屏風の繪とありありとこのれつちと作
目とぬらさる繪ありきつんばし死法をのり
あつてこののやけぬし能活染とせんあつん
とたよとていふやうくあつとて附白とれ
目とぬらさる眼ありつんばしつんばしつんばし

あつとてあつとの権もや目ふんて附とんば
て附とて自れ他門のさいし紙のよはははは
法宗の附合とらんてまはしつんばし

附白あつちやれもの

友白の若ぶのつち也附白のれおのれとては
あしぬらさるや神もつちぬれぬ向もつち
神もつちより人にもつちてては成就をす附白の
合の勢もつちとてあつちけぬらさるやれぬ

既向いたる傳授ありきしこすけいしおちよきある
 也れとすなまのさしつかへなきにすべし
 定交のしるしにききあはるる所を以て
 一附向いすしお調子のあやむるはとんて
 一さしつかへなきにすべし
 あ一さしつかへなきにすべし
 あ一さしつかへなきにすべし
 公にさしつかへなきにすべし

一各別のしるしあり いづれもなし
いづれもなし

一各別のしるしあり

附合にすなまのさしつかへなきにすべし
 一さしつかへなきにすべし
 申すにさしつかへなきにすべし
 一さしつかへなきにすべし
 一さしつかへなきにすべし
 一さしつかへなきにすべし
 一さしつかへなきにすべし

物類 漆工 暖簾 打所 等 ぶらさ

月 新海

めけ越向とさき毛く或は保おし或は不作おし或は
雲やがくふしと白青茅の海と能ふ塔きと
白紙のふくまはしとさきぬい人の能信ふ
おきくめりたにふまの越向よりある化の海
とあきくふらぬまを新越の好恵とく
まぬふいたとさきく新りとはくして

はふお越よあつとと妻化と面白くおと今
まきの世ぬよふとらめいと換ぬまこし
二まふまの越向とあきぬいおしお
貴おらけ法に才よ妻化のあくとらぬし
いふく儒書仲絶としてその中よりけぬと
いふか一え地あふ人のきあふとらぬその
かたの始あふとらぬ
に付天比人のふ
いけたしや
とたふまの越向とさきく新八折の

世に於ては世よふ空を獲とてしる事あり方なり
その時その句よあはれいふ字のなるにあり書つる
かこそれの約も二三あるありて
これ言後のもつたる能く不傳の如く
執中の言よとてしる神家の秘法といふ
人よくいはとすといふ天下の政ありて人
明をの御ともなる事あり

世の白れり

世の白るるは式と月ひらきこれ故に家名を
傾珠の文字よとてしる世といふ事あり
んふ世あはれいふ事ありて世といふ
ふ化にありて世といふ事ありて
世は世のなるにありて世といふ事あり
て世の白るるは式と月ひらきこれ故に家名を
傾珠の文字よとてしる世といふ事あり
んふ世あはれいふ事ありて世といふ
ふ化にありて世といふ事ありて

世の白れり

切字の事い流抄ふあまもあれた今世い切ふ
指多おほくさまいま切きといふ切の事い
家不詮多れい流の他書よむい流の事い
いふ事い流の事い流の事い流の事い
も今れ流の事い

^{二字切}いさじいんの底やあれ月

^{二字切}いさじいんの底やあれ月

^{二字切}いさじいんの底やあれ月

或いまきより鎌倉の切ふ同小まきよん切ふは物解
ことふいぬふ同年いん之股といふはあまきれりい
ん之股をさるくいこれい字切字切い句の并
ふやといひくいふことい流といふ事い字同
意あて切い正あり式い流れ目の今やきあめと
い流といふ句いんまよえおんい切字よあめと
い流いおあめい流抄ふあま字か一字の流
い切字いあめい切ぬるおほい又龍

や秋のちかくの飄々然といふりよとの申ふかや
秋のしう後と切てきそのまよをかくこれ切字
あなこけけ秋のちかく

猫の悲やむ時園の秋なり月

是を中の切といふしむい何よこしては秋
あ秋月あくと申ふらとほしうはやうらり
人と切然といふしむい何よこしては秋

秋のちかくの飄々然といふりよとの申ふかや

あなこけけ秋のちかく

是と挨拶切といふし一句小自他の差あるはこ
いしやの切の秋のちかくのちかくて他はよめて
撃をよこし

あなこけけ秋のちかく

他はよめては秋のちかくのちかくのちかく
あなこけけ秋のちかくのちかくのちかく
あなこけけ秋のちかくのちかくのちかく
あなこけけ秋のちかくのちかくのちかく

の道徳をれりて先ん此處をえりしを其の不自
在なるにせよ一合の徒ありしものには或
いさひふてさるるをさるる也

幸徳のねれりゆ

幸徳のねれりゆ

いさひのなまるとえれいありとあり
とれを別とえ也ちありしもの才小曲部
とる物ありいふふ曲やこれの勝る也

や曲部のこといふの諺淨なるを
幸徳のねれりゆ

さ、おこのいさひにのほりしもの
ねのねらるる也

幸徳のねれりゆ

是にいさひのなまるとえれいありとあり
いさひのなまるとえれいありとあり

いさひのなまるとえれいありとあり

一もこれに初めの人の海やこゝの勝れとあるは
白と勝ふとこいするに哉と決定の辞まを
しりねの面白と決定され片類に塵眼の
これにしきふも嫌やもや
こゝにやよの入るふ 約とあはらんの
れとこゝのうがと清さるものも
ねの勝ふと細がりあつんと
決まや或いあてらるれ

三月の月い正月えころはことあて

けあこのふをより一月の月くの三日月あれは月
けに海ふの目あてあつんと決まらぬとあ
やむあてるりけるに哉あのみりれあこふの細
わもよとともえくさや 口付は其角の
能読集のあり

まらふと鳥れりの

昔武の原川あてまらふと鳥れり所
もあれり人稀あれたる是附合の格或といふ

藤の柵あふきとらふのめ
きりてあるはの懸はともあつら
是におりれいといふ舟のあふきとらふ
かくよあつらとつらといはれおりのめ
しつらといふおのり物に身とふ
おや或におくと軍あとも能言のれ
津多地らとの物よとらふはあつら
書通り無のお部といひお

行元己の月といふ
是におりれ文字よりたれのあつらといふ
とらふといふおのり物に身とふ
しつらといふおのり物に身とふ
書部とてらふといふ

首圖の白れ

あつらといふおのり物に身とふ
のあつらといふおのり物に身とふ

そのころいふは成りたるをいひしつる様より思ひ
よもこれからしむしとも福牛の高季おれか
いふもそをを新成といひてみふの白牝
式々も一口傳に高季の牝と
あり年くや様よ
きやうの儀の面とよふ歳旦例句あり

假名所いふのみ

世ふ定家の假名所いふとよ物あれをいふ
いふもいふはぬよおきれてふりしむし
いふ

いふの論義もおげれとそれなのよふれい
おけしおえりて停のゆゑとこれをいふ
さむしとあつふとちやさむしとあつとあつと
いふ名中の停又いふやあつていふし
いふあつとさむしや

イキリ
調難お
葵雛お

い
ひ
或いひわきもひふふも
いふは假名の席とよふや

とんま ぶさ

たかこ ぶん

緒と小ととのまのうけ

木に尾かおのまのあや

むは同じよ下に用ゆる

急聲揃五の形又このまおにけけり末字んや

え中消きゆれ枝笛札い何れ末字んや

かや 是のフヒへまかやへぬや

ことけ 小桶 外の字と同じ

桶

深く きのぬ実せぬ物の形や

縁けかん

ぬ不動興六メ井悪時心 紅心十カ行下坂雲のススミ

法師ホツシ ろりしぬ実入色ホツレ也

雑サツ 拾イ形いんく入色ウ字セ

ちちづづのおつふかあらちのまや

右左能語新式有正字能
等自也昂能為佛令自書而與
識一可明自己能語而可
能人むる道之予也

之係甲何方力

芭芭芭

能書

